とは云へ、商人は全然自分の思ひの儘に、價格を定めることは出來ない。商人階級による、市場と價格との支配は、意識的に指導せられて居るものでもなく、商人階級が共同して支配して居る譯でもない。寧ろそれは、各々自己の利己的目的を追求し、從つて之が爲に、無意識的に相互の貪婪を制限し合つて居る。間歇的にして訓練なき行動の、相互作用の結果である。

商業の初期にあつてすらも、商品の社會的性質と、商品そのものゝ活動の社會的性質とは、商人に感知せられてゐた。商人は生産者と消費者とを相手に、價格の値切りコギリをやつたであらうし又生産に對しては、之れ以下には引下げられぬと云ふ價格の程度もなく、消費に對しては、之れ以上には引上げられぬと云ふ價格の限度もないものと想像したかも知らぬ。けれども彼等は漸次に、價格には一定の平均的限度があつて、特別の場合の外には、此限度を越えて上にも下にも、無理の出來ない事を悟つて來た。彼等が買ふことの出來る最低平均限度は、賣手間の競爭によつて決定せられた價格であつて、彼等が賣ることの出來る最高平均限度は、商人自身の間の競爭によつて決定せられた價格である。或商人は、特別の情況の下には、此平均限度以下で買ひ、此平均限度以上で賣つて、餘分の利潤を收めることも出來よう。けれども直ちに彼は、其所には支配することの出來ない或勢力があつて、其前に服從しなければならぬ事を悟つて來る。

斯ような經驗の自然の結果として、商人は、商品の價値に固有内在する神秘的の力を信ずることが、益々深くなる。

此社會的の力は、商業が、其掠奪する種々なる生産方法の下に、標型的の特質を帶びて來るに從

つて、益々商人に感知せられて來る。例令ば、奴隷を所有する貴族や、專制的の世襲族籍の國家と取引する場合よりも、遊牧的の種族や家長制の共産體の如き、直接生産者と取引する場合には、商人は一層容易に此社會的勢力を無視することができる。奴隷の所有者たる貴族と專制的の世襲族籍國家とは、多かれ少かれ、商人と同一目的を有するものである。そして彼等が侮蔑の眼を以て勞働を見ることは、商人以上である。然るに彼等に比べると、商人は下級者である。彼等の第一の目的は、富の累積であつて、使用の爲にする商品の交換ではない。彼等が自家の使用の爲に渴望する物があるとすれば、そは奢侈品、裝飾物、香料等に過ぎない。之に反して、原始的の生産者は、直接消費に要する物品を得ることを、第一の目的として交換する。そこで商人は彼等の必要に乘じて、容易に、最も有利な取引をすることが出來る。

斯ような情況の下に、商人自身も自己の活動により、彼等の交換する價値の等量の性質に對して漸次に、相當の尊敬を拂ふようになる。そして商品の社會的性質が、商人の賣買する價格となつて表はれるに從つて、異りたる市場に於ける異りたる價格の比較せられる結果として、容易に其間に一定の平均を發見することが出來る。そして此平均は即ち等量の形を取り、價格は此等量の上下に變動することゝなる。此等量は、各商品の眞の勞働價値と、時としては殆ど一致して居ることもあれば、時としては離れて居ることもある。けれども此段階では、兩者の一致と不一致とは何うでもよい。何故ならば、勞働力は尙ほ、正規の商品として賣買せられて居らぬからである。勞働の價格は奴隷の賣買せられて居る場合に於てすらも、尙ほ商品の價格に何等の關係をも有しない。何故なら